

研究ノート「アンコール地域の儀礼」

上智大学アジア人材養成研究センター研究員
阿部千依

はじめに

伝統文化や儀礼調査のためカンボジア、シェムリアップに位置するアンコール地域内の村落へと足を運んだ。季節ごとに目にした数々の儀礼は、カンボジアの人々の生命観の表現であり、自然やそれを司る神々との共存のすべを表すものであった。朝早くから、時には夜通し行われる儀礼は、ゆっくりと休憩を挟みながら進行する。その儀礼の合間に人々と交わした会話からは、彼らの精神世界が垣間見える。

人々の生き方を抜きにその土地に存在するものを考えることはできない。アンコール遺跡もそうである。アンコール遺跡は単なる遺跡という観光の対象ではない。人々の信仰を一身に受ける精霊の宿る大きな石の家なのである。遺跡には丁寧に遺跡に祭られた仏像を守る人々、真剣な祈りがある。例えば、かつてヴィシュヌ神に奉げられたヒンドゥー教寺院であるアンコール・ワットは、アンコール王朝が滅び、都城が密林の中に放棄された後も近くに住民の人々によって手入れされ、上座仏教の僧侶が住まい、それを助ける人々が暮らし、聖地としてカンボジア人のみならず、多くの外国人巡礼者を受け入れてきた。そのようにして、アンコール・ワットは「寺の都」と呼ばれるようになった。アンコール王朝の象徴である寺院を、放棄された後にはその周囲の人々が受け継ぎ、守り、現在のアンコール遺跡を形作っている。カンボジアの文化を理解するためには、カンボジアの風土とその土地に生きる人々とその精神性や死生観、そして日常生活のリズムから紡ぎだされるものの総体を知る必要があるだろう。

1. アンコール遺跡での雨乞い儀礼

2006年8月、遺跡調査の帰り、車からある遺跡の広場に人だかりを発見した。人だかりの中心には年配の女性が座っていた。その脇にはお付きの人たちと、伝統音楽を演奏する男性たち、そしてオレンジ色の袈裟を着た僧侶らの姿があった。それはまさに雨乞いの儀式が始まろうとしているところであった。その中心にいたこの儀式の主役は、近くの集落プラダック村に住む73歳の女性の霊媒師¹⁾であった。

雨乞い儀礼の舞台となったのは東メボン遺跡である。アンコール王朝時代、各王は巨大な人工の池バライ baray を建設し、広大な農地に水を供給した。バライの中心には水位計が備えられており、水位を確認することが王の重要な役割でもあった。この東メボン寺院は、人工池バライの中心寺院に建てられた、水を象徴するモニュメントである。稲が一番生長するこの時期に雨が降らないことは、彼らにとっては死活問題である。そうして雨乞いの儀式が自然と要請されてくる

1) この霊媒師をカンボジア語ではチョール・ルップ (チョール chol = 入る、ルップ rup = 体) といい、体へ霊を降ろすことができる人という意味である。

のである。

儀礼が始まった。まずは伝統楽器ピンピアット pin piat による演奏と、酒やタバコ、ご馳走が並べられる。中心にいる霊媒師の表情はまだ固い。そのうち霊媒師にタバコが勧められる。次に食事を一口ずつ口に入れる仕草をする。音楽のテンポが徐々に上がり、人々は掛け声や歓声を挙げ、霊媒師に守護霊が降りてくることを今か、今かと待つ。酒や食事、音楽で気分が高揚した霊媒師は、無表情のまま、すっと立ち上がった。観衆に緊張が走る一瞬である。その後、霊媒師は笑顔になり、音楽に合わせてゆっくりと優雅に舞い始める。それを見た観衆は喜び、笑い、歓声を上げ、拍手をする。これで雨を請う人々らの願いは、村の守護霊に聞き入れられたと考えられている。さらに伝統音楽の演奏は続き、観衆も踊る。霊媒師が踊りを終えると、僧侶による読経が始まり、まもなく儀式は終わった。普段は観光客で賑わうアンコール遺跡は、時に神聖な儀礼空間としての姿を見せる。

2. カンボジアの風土と暦

「カンボジアにはボンが多い」と人々はよく言う。ボン bon とは祭りのことであり、年中行事や日常的に寺に通うこと、個人的な通過儀礼、結婚式や葬式といった冠婚葬祭などすべてを総称してボンという。カンボジアの生活には暦に合わせた祭りがあり、人々は熱心に仏教寺院に通い、年間行事に参加する。それを適切に執り行うことによって、季節が経過していくのである。カンボジアは熱帯モンスーン気候に属し、乾季は12月から4月、雨季は5月から11月までと、一年を二分している。年中行事の基層をなすのは、この雨季と乾季という2つの季節的な区切りである。

クメール正月から雨季へ

4月新しい年の始まりである。乾季の末期で酷暑である。例年4月13日、14日、15日前後の3日間続くクメール正月には、人々は寺院に集まり、僧侶へ食事や日用品を寄進する。寺院では世界の中心を表す須弥山に見立てた5つの砂山がつくられ、土地の神にも祈りを奉げる。クメール正月の最終日には寺院の本尊を清める水掛け祭りスロンプレア srong preah が行われる。とくにアンコール地域では、寺院だけではなくアンコール時代の遺跡に安置されている仏像を洗い清めるため、人々は遺跡に集まる。例えば、バンテアイ・クデイ遺跡近くのロハール村では、クメール正月明けの初めの満月の日を選んで、近くにあるバンテアイ・クデイ遺跡に安置されている



正月の様子、バンテアイ・クデイ寺院（2008年）

仏像を洗い清める。この遺跡には彼らの村を支配する守護霊が住んでいると信じられている。その洗い清める水も、聖山クーレン山から流れてくる神聖な水を求めて、近くの川まで汲みに行くのである。そしてこの時期には伝統的な民俗芸能、トロット踊り trot が見られる。村の少年・少女たちで構成されたトロット団は鹿の角のお面をかぶり、音楽を鳴らしながら村中を練り歩く。クメール正月明けの満月の日まで祭りは続き、それが終わる

と、人々は田作りの準備を始める。そして村は農繁期、雨季を迎える。

雨季の終わりから乾季へ

本格的な雨季に入ると僧侶は寺院に籠って3カ月の間修行を行う。この雨安居の期間に僧侶は外出を控えなければならない。僧侶が托鉢へ出かける代わりに人々は熱心に食事の寄進するため、寺院へ通う。この雨安居中に、カンボジアの最大行事であるプチュン・ベン（盂蘭盆会）がある。例年旧暦9月から10月に行われ、その期間も15日間と長い。プチュン・ベン期間中は、朝から晩まで寺院から流れてくる読経と音楽とが村中に響き渡る。こ



プチュン・ベン儀礼の様子（2008年）

の期間、人々はまだ暗い早朝4時頃には寺に集まり、祖先への食事供養の儀式に参加する。もち米を一口大の団子状に丸めたものを綺麗に皿に並べて持ち寄り、布薩堂を3周しながらそれらを投げていくのである。これはこの早朝の時間帯に地上に降りてくる祖先の霊に食事を奉げる行為である。日中の寺では、村落や家族・親族、地域社会が単位となり、持ち回りで儀式を行う。そしてプチュン・ベンが終わり、雨安居が明けると僧侶に袈裟や日用品を寄進する仏教行事カティン祭（僧衣献上祭）が続く。地域の人々は寺に新しい袈裟や日用品、食事を寄進し、その行列が町を練り歩く。

雨季が終盤に差し掛かった10月末、スコールはその強さを増す。そして水祭りを迎える。河川では舟漕ぎ競争が行われる。舳先にコブラを模した飾りが取り付けられた舟は20人乗りのものから、大きなもので100人乗りのものまである。船頭はクロマーを頭に巻き、踊って音頭をとる。一対一の舟こぎ競争が3日間に渡って行われ、村単位でその速さを競う。この舟漕ぎ競争は、東南アジア、中国と西は日本まで分布している。いずれの地域でも、竜や蛇神ナーガといった架空の水生動物が舟を表象するという共通点が見られる²⁾。とくに東南アジア大陸部では雨季の終わ



水祭りの舟を出す儀式（2009年）



カティン祭の様子（2008年）

2) 清水純（1983）「東アジア・東南アジアにおける競舟儀礼について」、季刊人類学14-1、pp198-255。

り頃に行われ、アンコール地域ではトンレサップ湖へと帰る精霊を見送る儀式とされている。

乾季に入った12月、稲の収穫が行われ、一家総出で、村の人にも応援を頼み、手で稲穂を刈っていく。庭先では収穫した米を納屋にしまったり、脱穀を行う風景がみられる。収穫作業も一段落した2月には一年の無事と来年の豊穰を願い、村の守護霊の祭り、ネアック・ターの儀式が各村で行われる。この年に一度の村の守護霊ネアック・ターの祭りでは、その年に収穫した米から作った料理を守護霊の祠に奉げる。各家庭では米を石臼でひいて米粉にし、麺をつくる。その米麺に、蒸した淡水魚をココナツミルクで味付けしたソースをかけたヌンバンチョップという料理が供えられる。村人は料理を大きなお盆に並べて持ち寄り、守護霊の祠に集まる。村のアチャー *achar* と呼ばれる儀礼専門家の先導で、精霊への祝詞が奉げられ、人々は手を合わせながら聞き入る。そして祝詞が終わると、アチャーが皿に盛られた食事を祠へ供える。その後、人々も一斉に自分たちが持ち寄った米料理を皿から祠へと次々に空けていく。スラー・ソーという米から作った酒も祠へ注がれる。たちまち祠はお供え物の食物で一杯になる。そして人々は次の年、次の雨季を待つのである。このようにして、カンボジアでの一年は乾季から雨季への移り変わりとともに過ぎ、その節目、節目に祭りが行われていく。

3. 人々の日常宗教実践

クメール正月やプチュン・ベン、カティン祭のような大規模な年中行事以外にも、満月、半月、新月といった日は仏聖日タガイ・セルとし、この日には人々は寺院に集まり、戒律を請う。年配者や寺院から離れた地域に暮らす人々は、前日から寺院へ集まり、奉げ物を準備し、戒律を請い、説教を聞き、寺院で就寝する。翌朝も説教を聞き、僧侶への食事を寄進したのちに家路につくのである。

現在、カンボジアは上座仏教国であり、国民の約9割が仏教を信仰している。カンボジアへの上座仏教伝来の経緯についてはよく分かっていないが、13世紀には人々の間で広まり³⁾、周達観の『真臘風土記』によれば13世紀末までにカンボジア仏教の上座仏教化が進行し、15世紀末にはカンボジアのほとんどの村に仏教寺院が建設されたといわれている⁴⁾。上座仏教は宮廷から村落に至るまで、あらゆるレベルのカンボジア社会に深く浸透し、農耕儀礼やネアック・ター信仰などの精霊信仰と融合していった。

上座仏教では出家をし、サンガに入り、戒律を守り、自己の解脱を目指す。青年男子は出家し、家族、とくに母親のために修行し、功德を積む。一定期間出家をすると還俗し、この出家は成人儀礼の1つをみなされている。老年期に差し掛かった人々は、寺院へ通う信仰生活を始める。家族も自分たちの親が修行生活に入ることを勧め、それを助ける。子どもたちが寺院で修行中の祖父母に食事を持っていく姿をよく見かける。

カンボジアでは、各村落に仏教寺院があり、コミュニティーの中心をなす。とくに1975年に始

3) Chandler (1996:69) Chandler, D. P. *Facing the Cambodian Past: Selected Essays, 1971-1994*, Chaing Mai: Silkworm Books.

4) Keyes (1994:44), Keyes, C. F. (1994) "Communist Revolution and the Buddhist Past Cambodia", in Charles F. Keyes, Laurel Kendall and Helen Hardacre eds., *Asian Visions of Authority*, Honolulu: University of Hawaii Press.



葬式の様子：ロハール村にて（2010年）



葬式の様子：南スラ・スラン村にて（2008年）



カオ・チョップ儀礼：南スラ・スラン村（2010年）

まるポルポト政権期には、すべての宗教は否定され、僧侶はすべて還俗させられた。その後も20年に及ぶ内戦状態で、カンボジアの農村はすっかり荒廃し、人々のコミュニティーも崩壊した。カンボジア和平後、徐々に寺院の復興が行われ、宗教行事も復活するものの、現在でも若い僧侶が多い。さまざまな行事で彼らを支えるのは伝統を知る村の長老であり、儀礼を専門に扱う人物アチャーである。アチャーは出家経験のある男性が、村人の要請によって務めることが多い。パーリ語を介して、僧侶と在家との対話形式で進む儀礼場面で、在家を補佐しながら、儀式全体の準備とその進行を行う、重要な役割を果たす人物である。儀礼場面では僧侶のオレンジ色の袈裟とは対照的な、在家と同じ白装束を纏う。アチャーは儀式の種類によって担当が分かれており、結婚式や葬式、また伝統的な成人儀礼カオ・チョップ、水祭りの舟を祈願するアチャーなど、行う儀礼によって専門のアチャーがいる。

4. カンボジアにおける霊魂観と霊媒師のための儀礼

上座仏教が人々の生活のリズムをなしている一方で、基層文化として精霊信仰も根強く残る。カンボジアの人々は、生まれつき19の魂が体内に宿るとされている⁵⁾。その魂が1つでも失われると病気になり、魂が身体から完全に失われた状態が死と考えられている。人々は病気になった際、薬を飲んだり、病院へ行き医者から西洋的な治療を受けるよりも、まず先に霊媒師のもとを

5) Ang Choulean (2004:2), *Brah Ling*, Reyum, Cambodia

訪れ、病気の原因をみてもらう。そして霊媒師はその原因を突き止めると、魂を身体に強く結び付ける魂の強化儀礼を行う。村の人々は、病気の治療のほか、身近な家族間の問題、出産祈願にと霊媒師のもとを訪れる。霊媒師による儀礼は人々の人生のさまざまな場面で現れる問題全体を扱い、多岐にわたる。この霊媒師自身、3年に一度、ラン・メモット⁶⁾と呼ばれる治療儀礼を自らのために行う。この治療儀礼は、メモットが自らの守護精霊を次々と降ろして行われ、周辺の村落から霊媒師を信仰する人々が大勢集まる。

このラン・メモット儀礼を観察するため、2010年2月、アンコール地域の北スラスラン村を訪れた。霊媒師N（女性、75歳）の家の前にはテントが張られ、ゴザが敷かれていた。バナナの幹と葉でつくられたお供え物が並ぶ。儀礼が行われるテントでは、楽器の演奏が始まっている。楽団のメンバーは酒も飲みながら演奏し、酔いに任せて、テンポを上げる。日が落ちたが蒸し暑い。徐々に人々が集まってきて、人々の熱気も加わる。今日の儀礼には、北スラスラン村から30kmほど離れたバンテアイ・スレイ村に住む霊媒師Y（女性、70歳）も来ており、共同で儀式が行われた。

しばらくすると家屋から霊媒師Nが、甥に手を引いてもらいながら降りてきた。高齢のせいで目も悪く、歩くのもやっとの状態である。手を引かれて準備された祭壇の前まで来ると、正座をし、手を合わせ三礼する。補助をするのは姪である。祭壇の最前列に2人の霊媒師が並び、その脇にはお付きの人が控える。その後ろに親族が座る。そしてそれを村の人々を取り囲む。

2人の霊媒師は音楽に合わせて体を前後揺らしながら、自らの守護霊を呼ぶ。霊媒師Nに、まず村の守護霊ネアック・ターが降りてきた。北スラスラン村とお隣のロハール村を守る、男性の守護霊タ・スパイである。霊媒師Nは守護霊が降りてくると、トランス状態に入り、踊る。まもなくお付きの人に服を着替えることを要求する。霊媒師Nは手渡された黒い綿のズボンを履き、白いシャツを着る。これは年配の男性が祭りに行くときの服装である。そして頭にはクロマーという布を巻く。その間も踊りは止めない。着替えが終わると、木で作った拳銃を片手に、男性らしく荒々しく踊り始めた。自然と音楽も激しくなり、合いの手を入れる周囲の人の声にも力が入る。この守護霊タ・スパイは、カンボジア内戦時代にはその強力な力で村を守ったと伝えられている。拳銃を振り回す仕草は、その村を守ったときの様子を表現しているのだとお付きの人が教えてくれる。霊媒師の踊りに、周囲からは歓声と笑いが飛び交う。普段は歩くことにも不自由する霊媒師Nだが、その踊りは激しく、男性らしい。酒を飲み、煙草を吸う。一通り踊ったところで、音楽もゆっくりとなり、祭壇の前に座りこんだ。ひとまず守護霊タ・スパイが帰り、儀礼が収束する。しばらくの休憩を経て、続いて現れたのは、霊媒師Nの母と名乗る守護霊である。今度は女性らしい優雅な踊りが始まる。サロンを腰に巻き、レースのブラウスに着替える。もう一人の霊媒師Yの手を取って、一緒に踊り始めると、周囲からの歓声が沸く。このような形で次々とメモットの守護霊が降りて来ては、踊りを繰り返す儀式が一晩中続いた。これが霊媒師自身の身体を清める治療儀礼だとされている。

6) ラン *loeung* とは盛り上げるという意味である。シムリアップ地方では霊媒師をメモット *memot* と呼ぶことが多い。ラン・メモットは霊媒師を盛り上げる祭りを意味する。



ラン・モモット儀礼の開始場面（2010年）



ネアック・ターの儀式（2008年）

5. 結びにかえて

カンボジアの地は、古くから中国・インドを目指す商人らの風待ちの地として発達した東西貿易の中継地点であった。インドシナという名前が示す通り、インド文明と中国文明とが混じりあう地である。交易を通じた人々の交流によって、その2つの文明が生み出した文化的要素の受容と選択を行ってきた。この時代にヒンドゥー教もインド人商人とともに流入し、王朝の基盤となった。一方で中国からは農耕にまつわる儀礼を受容した。カンボジアの農耕儀礼には中国南部に起源をもつといわれているものも多い⁷⁾。

扶南から真臘へと王朝は変わり、交易路の変化とともにカンボジア王国は内陸化していく。そして神聖な地アンコールに拠点を据えた。クメール文化隆盛の時代を迎え、そこに隣国タイから仏教文化が加わった。儀礼の中には、こうした重層的な文化に由来する、さまざまな異なる要素をみることができる。儀礼の始まりには土地神に供物を奉げ、上座仏教の戒律を請い、そして豊穡を村の守護霊に願う。だが人々にとってはそれらの異なる宗教要素は対立しあうものではなく、すべてが儀礼の要素として欠かすことができない。村落や遺跡、自然、至るところに精霊が宿る。アンコール王朝時代のヒンドゥー教寺院に住まう守護霊もいる。雨季と乾季という季節の流れとともに移り行く、それらのすべての精霊に、適切な時期と儀礼を選んで感謝を奉げる。そのような生の連関の中にアンコールの人々は生きているのである。

参考文献

- デルベール, J.(2002) 『カンボジアの農民 自然・社会・文化』, 石澤良昭監修, 及川浩吉訳, 風響社.
Ebihara, M. (1968) *Svay, A Khmer Village*, Columbia University Ph.D.
グイ・ボレ, エヴリース・マスペロ (1944) 『カムボジャ民俗誌—クメール族の慣習』, 大岩誠・浅見篤訳, 生活社.
石澤良昭 (1975) 「クメール文化の原像—ネアック・タの土俗的な世界—」, 『アジアレビュー』, pp.148-153.
Porée-Maspero, E. (1962,1964,1969) *Étude sur les Rites Agraires des Cambodgiens*, Vols 1, 2, 3, Paris: Mouton & Co. La Haye.

7) グイ・ボレ, エヴリース・マスペロ (1944)